

台湾の喪葬について

岡田 栄 照

台湾で挙行せられる喪礼の多くは清代、龍溪の人、呂子振の編輯による「家礼大成」が基本となっているが、その本は「朱子家礼」を根拠としている。文献は極めて繁文縟節であり累代の士大夫の改訂により地域と時代、そして各階層に於て演変を重ねている。

民間に通常施行されている葬儀の風習は大陸と類似し、死者に対する処理は精霊信仰、祖先崇拜、守礼尽孝、巫法と輪廻、家族と子孫繁栄の誇示等々、複雑な觀念に左右されつつ、全力投球で虔修される。

台湾の住民は大多数が閩粵兩省に祖籍を有するので通行的礼俗も兩者の大系に分岐するが截然なる區別はない。

寿終正寝、中年以上で配偶者、子女がそろっている状況で臨終を迎え、正庁に移されて死亡することは中国人の光栄とすることであり、病人が危篤の場合、病人を寢室から正庁に移すことを徒舖、移舖、掃庁、搬舖などと称せられる。

仏教徒は断氣後、八時間してから徒舖すべきであると主張

している。

本省人の觀念として死者が寢室にあることは忌諱にふれる。男は正庁の右、女は左に移され、年長者が生存している時は未成年の瀕死者は徒舖することが許されない。

徒舖される人が死後に家族に配分する遺物（形見）は「手尾錢」といわれる。

病人が危篤の時に家族は川辺に行つて流水を汲むが、乞水とも買水（銅錢を川に投入する）ともいわれている。

全福人、好命人（幸福な老女）を招いて沐浴の式を行う。現在の淡水河は汚染が進んでいるので乞水の対象とならない。

寿衣（経帷子）は必ず相続人が試着してから死者に着せる。

寿衣は、洋は陽に通じ（陽間はこの世、あの世は陰間）るので材料として避けることがあり、緞子は断子と同音なる故に使用されない。

「套衫」の終りに素麵と紅糖を食べ、延命にあやかつて「抽寿」がなされる。

死者の足元に供えられる一杯の飯（戸外で炊かれる）は脚尾飯（枕飯）といわれ、家鴨の茹卵と二本の箸が立てられる。

脚尾飯は閩南の下層社会の風俗であり、中流では御馳走を供えて礼拝する。

棺の購入は大事なことであつて富裕な人は健在の時に、寿板（棺）を用意し棺木店で保管される。

寿衣と寿板を用意することは延命につながるという考え方があり、台北市の人は上等の棺を求めて艋舺（万華）或は大稻埕（延平北路）に行くが、特上の棺を求めて近郊の新莊まで出向く人もある。

棺を求めに行くことを接棺といい「買棺柴」と云わないで「買大厝」、「放板仔」と云い換える。

屋外で死亡した人は、その遺体が家の中に搬入されること が許されないので門外天幕の中に棺が放置されていることがある。

風俗習慣は人道的なものであるから禁忌も多いが抜け道も工夫案出されている。

一昔以前は父母が死去した時、孝男は四十九日間、外出を禁ぜられた。

この慣習を厳重に遵守することは、可成り無理なことであり、生活を維持するために外出を余儀なくされる。

広東省東部の客家人の祖籍地では、人々は次のような変通

的方法を案出している。即ち、笠で顔をかくし外出して仕事に従事するという方法が採用され、この慣習は台湾にも伝入したが現今ではあまりみかけられない。

閩南の農村の風習では母が死亡すれば、その兄弟の驗死を待って入棺するということがあった。女性が虐待された時代の風習の残存である。しかし男女平等の今日でも台北地区では、この風習の元来の意味を伝え誤って、父が死亡した時、母の兄弟に死体を検分させるという一知半解のことがあった。今では、道理にあわぬこのような習慣は省略されて「大殮」の日に舅舅（母の兄弟）が到着すると、すぐに棺の蓋をするようになった。

両親の死の消息をきいた娘（他家に嫁した）は実家が近づいた時、「哭路頭」が必要になる。大声で叫びつつ、ありし日の父母の慈愛がいかに深甚であったかということ、そして惜別の情を惜しみなく表演する。この情景を見物することは一種の娯楽とすらなっていたが今では見物することは困難であり、この風習は読書人にはない。

納棺は大殮、入殮と称せられるが、その時刻について択日師に選定を依頼することがある。

納棺前に、酒席をもうけ和尚を招き統経、亡魂を超渡することを「辞生」というが、六道葷菜、六道素菜を具備した十二道が用意される。

次に、「割闔」（コアカウ）について略述しよう。家族は一条の長い麻糸を亡者の袖口につなぎ、その糸を引く。家族はその麻の一端を握り、司公がそれを一段一段と、切断し、皆の握っている一段の糸を銀箔に包装し火中に於て燃焼させることをいうが、死者と家族との関連を断絶せしめることを意図する。

納棺に際しては若干の冥紙、一本の桃枝（黄泉への旅の途次、野獸を駆逐するためのもの、桃の避邪については、左伝、淮南子、をはじめ多くの文獻に記されている）、一つの石、ゆでた鶏卵、一枚の「過山袴」、豆鼓包が用意せられる。袴の発音は客家語で富と同音であり、吉祥とされている。「過山袴」の縫い方は変則的にしてあるので陰間に行く途中で鬼に与え、鬼を騙すように製作されている。

「鶏枕」は赤と白の布で縫われ中に銀紙を封入した枕であつて棺中に収められる。

客家地区の風習として「跳棺」の儀式があるが、後顧の憂なく後妻（続弦）をめとるという意味を持つが、日本統治時代に「唐山ニ帰ル」ということは祖国、中国に対する懐念の大義を暗示するものであつて、後妻云々などは問題ではない。

近來、次の諸件に関して陋俗を改善すべきであるという意見が、政府筋、識者によって提出されている。

一 人道上、断氣以後に移鋪されるべきである。理由は病人に最後まで適當な医療を継続させるべきである。

二 検死の習俗は双方にとつて、まことに不合理である。

三 戴笠、套衫の習俗はよろしく廃止すべきである。

不戴清朝之天、脚不踏清朝之地

という漢人の反清民族意識のしからしむるところであつて時代の進歩にあわない。

四 病人が断氣後、或は亡者が入殮の時に開魂路的習慣があり道士を雇傭して、「跳神」、誦經の作法をなす時に、拡声器を使用し、近隣の安寧を妨害してはならない。

五 入殮の時に、桃枝、石頭、豆鼓、飯糰（だんご）、家鴨の卵を収めることは迷信的色彩が濃厚であり、その伝説、由来は荒唐無稽なことが多いので一考を要する。

六 告別式、忌中の文字を門前に貼布することは日本の植民地時代の旧習であり、光復後四十年にしていまだに使用し、甚しきにいたつては政府が設置している殯儀館に於てすらも誤用していることは恥辱であり、よろしく中国の古礼によつて「嚴制」、「慈制」と書すべきであり、告別式は「発引」と記すべきである。

七 「計聞」をみだりに濫発することは嚴禁すべきである。

大多數の公務員は、よく法令を守っているが往々にして治喪委員會の名に於て濫用されている。

八 「金童玉女」の風俗は、中古時代の帝王の殉葬を真似たものであり、紙でこしらえた人形であるとはいっても費用のかさむものである。

歴代の帝王にあっても名君は詔を発令して廃止したということを銘記すべきである。

九 風水説によって墓地を選択することは公墓制度に、よくない影響を与えている。

風水説は陰陽家の言であり、中国の歴史上、根強い伝統があるので一朝一夕に除去できないが「福人得福地」の説もある。

十 台湾は炎熱の土地柄であるから「入殮」の後、なるべく早く、「打桶」までの停柩時間を短縮すべきである。

十一 送殯の花車はよろしく制限すべきであり、特に指導的立場の人は範を示すべきである。

十二 路祭について

従前は出殯に際し親族、朋友が先を争って路傍に机を置いて酒肴を用意して弔意を表示（路祭）する慣習があり後に悪く利用されて喪家に代償を要求することによって嫌悪せられた。今日では茶のみを準備するか、或は廃絶の傾向にある。

一般的には喪家は「路祭」を主持する人に何倍かの金銭を与える。その金銭が不足する時はけしからぬことが起り易く、用心棒まで要請することがあった。

近年は、車社会の出現によって「路祭」の空間が減少し、消滅の運命にある。

唐、宋、明、清の礼典に路祭の記載はみられぬが宋の書儀（司馬溫公撰）及び、家礼にその記事があり、清代の「彰化県志」「重修鳳山縣志」に「路祭」の記事がみえる。

十三 殯葬行列の各種の「陣頭」は悉く排除すべきである。中国文化の偉大さは物質文明にあるのではなく礼楽制度の完備にある。

出殯遊行に於て「三蔵取経」に仮装することは佛教を冒瀆するものであるから、法律を制定して嚴重に禁止すべきである。

（本論稿の成立に関しては台湾省文献委員会 主任委員であられた林衡道先生の御教示と、岡山大学に留学中の高淑玲さんの御協力が得られたことを記して謝意を表する次第である。）

参考文献

台湾地区現行喪祭礼俗研究報告

中華民國台湾史蹟研究中心

印行

台湾文献二五—一、二、三、二七—三、二九—二

（寺院住職）